

---

# 茗荷

花村かおり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

茗荷

### 【Zコード】

N7111Y

### 【作者名】

花村かおり

### 【あらすじ】

本当の恋をしたことがない25歳の女性が、大人の恋に飛び込んでいく

その日は秋の長雨が終わり、天気の良い日だった。直子が勤める会計事務所は少し古いビルにあり、エアコン配備されているものの、ビルの設計が悪いのか、室内は少し汗ばむくらいであったが、直子は淡々と仕事を進めていた。

公認会計士の先生が1名、従業員4名、パートさんが3名の小さな事務所ではあるが、それぞれが担当毎に仕事を上手く回し、また人間関係もとても良かつたこともあり、直子にとつては居心地の良い職場だった。直子は大学で会計を学び、公認会計士の第1段階となる試験は合格しており、この事務所で実務を経験しながら、残りの試験に合格して、ゆくゆくは公認会計士になり、独立などを考えていたが、居心地の良さに、ずっとこのまま補助者でも良いと思つてしまつ。

年度末調整の時期は、ものすごく忙しくなるが、それ以外は残業も少なく、自分の時間もとれた。その日も定時を少し過ぎると、次々と社員が「おつかれさまです」と声をかけて帰つていつた。直子もそれに違わず、挨拶をして事務所を出た。

事務所は直子の自宅から1駅ほど場所にある。晴れた日は1駅、30分ほど歩いて帰ることが多かつた。その日も天気のよさにつられて、30分歩いて家路についた。

直子の自宅は閑静な住宅街であったが、その中にぽつんと理容店と日本料理屋が2店並んで、商売を営んでいる。直子の家はその「ぽつん」の1つの理容店であった。日本料理屋は1つ小さな道を挟んで向かい側にあつた。

家に帰ると両親が数名のお客の対応をしていた。お店は8時まで営業していたから、夕飯は直子が作ることが多かつた。

昼間に母親が買つてきた食材を利用して、簡単なおかずを作つて、食卓に並べるとその日の仕事が終わつたような気がした。本来なら

ば、両親の仕事が終わるのを待つて、一緒に食事をするのだが、その日はその気にならず、一人先に夕飯を済ませ、自分の部屋に戻つた。

直子にはつい最近まで恋人がいた。大学時代の一期先輩で、テニスサークルで知り合つた。大学時代から付き合つていたのではない。卒業してから、OB会で再開し、自然の流れで付き合うようになつた。特にお互い猛烈に好きだつたという訳でもなかつた。でも、お互い気が合う相手だつたし、付き合つている間は楽しかつた。しかし、別れる数ヶ月前から詳しいことは良く分からぬが、会社の経営が危うくなり、彼も仕事に付きつ切りになつっていた。一週間に一度ぐらいは時間を作つて、会うようにしてはいたが、それもままならなくなつた。直子が心配してメールをしても、返信はほとんどなくなつた。今年の夏の終わりに「私のこと忘れちゃつたのかな?会いたくないのかな?」というようなメールを送つた。それから、何度もメールを送つても、返信が来なくなつた。病気でもしていなかと、心配になつて、昨夜、携帯に電話をしてみたら、着信拒否となつていた。そのとき、捨てられたのだと認識した。こんなこと生まれて初めてだつた。

なんで捨てられたのか分からぬ。でも、受け止めるしかないのだ。よくよく考えてみれば、彼の外見も性格も好きではなかつたような気がする。彼のことを本当に愛していなかつたのだと思つた。悲しくもなんともなかつた。ただ、彼が不誠実であることに失望した。こんな風に簡単に捨てられてしまう自分が惨めになつた。

「まあ、こんなこともある。考へても仕方ない」と声を出していつた。

すると母親が私の部屋に入つてきた。

「直ちゃん、もう寝ちゃつたの?」

「寝る訳ないじゃない、まだ8時前だよ」

「だつてご飯先に食べちゃつたみたいだから」

「ああ…、ちよつと、勉強しようと思つて」

その割には参考書もノートも広げていらないのを母親は気づいてか、「あら、そうなの。勉強中悪いけど、寿屋さんに茗荷、分けてもらつてきてほしいの。お父さんがどうしても冷奴の薬味に食べたいんだって」と言った。

「うーん。わかつたよ」と私はしづしづ椅子から立ち上つて寿屋に向かつた。寿屋は向かいの日本料理屋さんのことである。寿屋の裏庭では、この時期になると茗荷が自然に生えてくるのである。

私は道を横断して寿屋の勝手口に向かつた。

とんとんとドアをたたいて「すみません」と軽をかけぬと「あこよ」と威勢の良い女将さんの声が聞こえてきた。

寿屋は料亭のような品の高級料理をメインに固定客を抱えていて、景気も良いみたいだつた。中からはお客さんとの笑い声が聞こえていた。

「あら、直子ちゃん、今日はどうしたの。」

「すみません、父が寿屋さんの薺荷がほしうつていつもで、分けてもらえませんか?」

「いいわよ、芳夫さんは薺荷が好きだものね。ねえ、誠一さん、庭から薺荷とつてきてあげてよ。」と女将さんは言った。

誠一さんはこの料理屋の板前さんである。板前らしく、白い帽子と衣装を身につけていた。髪の毛も短く、皆が抱く板前さんの典型的よつな清潔さを持つっていた。

「ええ、いいですよ」と言ひてので、

「私も一緒に取りに行きます」と誠一さんについて行つた。

当初はその前は女将さんと旦那さんの二人で切り盛りしていたが、誠一さんは直子が高校生のころ、この店にやつってきた。神楽坂の有名な料亭で働いていたのをやめて、この料理店に勤めるようになつたと聞いていた。誠一さんが勤めるよつになつてから、料理店は繁盛するよつになつたよつに思える。年に何回か家族で食事に行くこどがあるが、誠一さんが作つた料理は全て、美味しかつた。女将さんも旦那さんも誠一さんのことを見つめていた。

裏庭で誠一さんは薺荷を見繕つて、4束摘み取つて直子に見せた。

「お父さんはこれで満足かな」

「ええ、こんなにいただければ大満足です。ありがとうございます」と答えた。

誠一さんは妙な色氣がある、飾らない板前さんの格好で、年も4

〇は週末でこるだらうて、一晩、一晩に色気を感じた。

「じいの名荷は毎年生える場所が変わるんだぜ、去年はあつて、今年はいこに生えてる。まるで意思をもつてこつだね」

「なんですか?」

「やう、不思議だろ」

「不思議ですね」

「やうこやわあ…」

「直ちゃん、いくつになつたんだい」

「今年で25になりますよ」

「やうかあ、どうりで綺麗になるはずだ」

直子は誠一さんにそんなことを言われて、心臓がドンッとなつて何も言えなかつた。誠一さんは、そんな直子をじつと見つめている。しばらく経つて、「お世辞ありがとう」やこあす。」と私は言つた。「いや、お世辞じゃないよ。それに直ちゃんは頑張りやだからね、公認会計士になりたいんだ。おれそれ聞いたとき驚いたよ。」「でも、なりたいだけで、なれるかどうかは難しいんです。」「いや、直ちゃんだったら、できそうだよ。意思が強そうなあ。」「いえ、でも難しいですよ。」

「あはは、とにかく頑張つてよ。」と言つて、はい、と言つて、家に戻つた。

心臓がまだじきじきしていた。誠一さんと話すといつも、やうだ。でも誠一さんにとっては私なんて小娘で相手になんてしてくれないだろうと直子は思つていた。それに誠一さんは恋人がいるようで、時々店にも顔をだしていた。清潔そうな誠一さんと対照的に、派手な水商売系の匂いのする女人だつた。

家に帰ると「お母さん、もらつてきたよ」と台所にぽんと名荷を置いて、自分の部屋に戻つた。心臓のじきじきせしまりく取まらなかつた。

その日、直子は午後に休暇をもらひて、午前中の業務を終わらせて、あわてて事務所をでた。離れて暮している5歳年上の兄から連絡があり、会いたいと言われたからだ。

寿屋の前を通りると誠一さんが女人の人と談笑をしていた。直子は軽く会釈をして通り過ぎようとしている。

「直ちゃん、お帰り、今日は早いんだね」と誠一さんが声をかけてきた。

「ええ、今日は兄と約束をしているので、無理を言つて、休みをもらつたんです。」

「へえ、隆と会つのか、元氣しているかな? よろしく言つておいて「誠一さんは言つた。」

「はい、伝えておきます」と言つて、誠一さんが女人の人と一緒にだつたから、なんとなく会話をするのがばかられたため、では、と言つて急いで家に向かつた。

家に着くと畠や、母が、

「直ちゃん、今日は早いじゃない、どうしたの?」

「ちょっと、友達と会つ約束をしていてね、午後お休みをもらつたの。」

「へえ、いいわねえ」と母は言つて、仕事に戻つていつた。両親に兄の隆と会つことは伝えられなかつた。

兄は5年前に家を出ていた。兄には近所に幼馴染の婚約者が居た。しかし、結婚式をどうするか決める段階になつて、突然、婚約者と別れてしまつたのだった。

それと同時に兄は家を出た。母は

「何も家を出なくてもいいじゃない」と言つた。兄はそのひる、実家の理容店で理容師として働いていたからだ。

「美希に申し訳ない。俺にはもう会いたくないだらうしや」と言つ

て、さつさと別の理容店に就職を決め、家を出て行った。それからは年に1度ぐらいしか実家には戻つてこない。

兄は直子だけに道ならぬ恋をしたと告白をした。好きになつてはいけない既婚者の女性を好きになつてしまつたということだった。相手も自分のことを好きでいてくれる。こんな気持ちになつたのは初めてなんだよ、と言つた。

直子は着替えてから、急いで家をでた。誠一さんはまだ通りに居て店の周りをぼうつきで丹念に掃いていた。もう女人人は居なくなっていた。

「今日はお店お休みなはずなのに、どうしたんですか?」と私は尋ねてみた。

「今日はね、旦那さんと女将さんが法事でいないんだよ。だけど、明日、大事なお客様が来るんでね、仕込みをしに来ていたんだ」と誠一さんは答えた。

「隆さんに会うんだり、彼女と上手くやつていているのかね」兄は誠一さんを兄のように慕っていたから、女性関係のことも相談していたようだ。

「私も最近のことば良くわからないんです。だから、今日聞いてこよつと思って」

「もうだな…。たまには俺のとこにも顔を出せと伝えておいてくれよな」

「ええ、もちろん」

そう答えて、兄が待つ場所に向かつた。

兄は駅前の古びた喫茶店で待つていた。

「直子、久しぶり、元気にしていたか?」

「お兄ちゃん、元気にしていたけど、突然どうしたの?心配したよ。しかも、家には帰らないで、別の場所で話そうなんて」

「いやや、家にかえると母さんが戻つて、理容店を継げつて、いるさいだろ、だからさ」

「まあ、ただけど」

「美希は元気にしているかい?」と兄はかつての婚約者のことを聞いた。

「美希さんは…、昨年、近所のおばさんのつてでお見合いをして、

結婚したわ」となんとなく伝えづらこ」とだったが、正直に言った。

「そうか、美希は幸せになつたんだな」

「ええ、来年には赤ちゃんも生まれるんだって」

「そうか」と兄は言つとタバコを一服した。

「ああ、それと寿屋の誠一さん、たまには俺のところにも顔を出せつて言つていたよ」

「誠一さんかあ、懐かしいなあ、元氣かい」

「うん、元氣そうにしているよ」

「そうかあ」と言つとふうつとため息をついた。

「ねえ、お兄ちゃんは女人と上手くやつているの?前、話してくれた」

「そうねえ、上手くは行つていな」

「なんで」

「相手は所帯持ちで離婚はできな」つて最近になつて言い始めたんだ

「でも、最初は離婚してお兄ちゃんと一緒になりたいつて言つてい

たらしいじゃない」

「そうだつたなあ、でも婚姻関係を解消するのは難しいらしいんだ。相手がうんと言わないし、慰謝料とも請求されているんだ」

「じゃあ、慰謝料を払えばいいんじやない」

「まあ、そうだな。でも、ホントは田那との安定した生活を壊したくないんじやないか?」

「でも、そしたら、お兄ちゃんと続けるのもおかしいじやない」

「確かにそうだ、でも、もう離れられなくなつてしまつてね」

直子は少し黙つた。直子は兄のように恋に燃え上がつたことがないから、実感がわかぬ。

「直子…、直子はどうすべきだと思うかい?」と尋ねてきた。

「私は、そんな人と別れて、また新しく生活を始めるべきだと思うわ。もう美希さんも幸せになつたんだもの。うちに戻つて、働いてもいいじゃない」

「そういう考え方もあるかねえ。近所では俺は悪者だぜ、結婚間近で女を捨てたひどい男」と兄は遠くを見ながら言っていた。

「そんなの、昔の話よ」

「いや、そういう噂はなかなか消えないんだ。女も寄つてこない女が寄つてこなくてもいいじゃない…」と言い掛けたが辞めた。

「いやや、今日は、直子に話を聞いてもらいたかったんだ。仕事お休みをせて、ごめんな」

「いいよ、今は忙しい時期じゃないんだし」

兄はこれからどうするつもりだろう。少し心配になつた。

私も彼に振られたんだよ、とかそういうことも話したかったけど、話す気になれなかつた。直子の失恋と兄の恋愛とは重みが雲泥の差で違ひすぎるのだ。

話が済んだのか、兄はお会計をしようと言つて、店をでた。

「今日は、ありがとう。また、電話するよ、誠一さんによろしく伝えておいてくれ」と言つて駅に向かつていつていった。

それから数日たつた」とであった。直子はいつものように寿屋の前を通つて、家に帰ると「ひで誠一さん」に会つた。

「直ちゃん、お帰り」

「ただいま」

いつものように答えていた。

「昨日、隆から電話が来たよ」

「何か言つていましたか」

「俺に相談したいことがあるつていうんだよ。直ちゃんには、もう話しているかもしれないけど、それで、今夜俺のアパートにくるつて言つんだ。直ちゃんも一緒にどうかな?」

「ええ…、いいですけど。私も兄のことは心配しているんです。どういうつもりなのか」

「じゃあ、決まりだ。今日は予約が入つてお密さんが7時までだから、8時にはアパートにつけると思つから、隆と一緒にいで」「ええ、じゃあ、悪いけどお邪魔しますね」

直子は誠一さんのアパートに言つたことはないけど、近所だから住んでいる場所は知つていた。いい年をした腕のいい板前が住むような家ではなかつたが、男一人だから十分なのが、その小さなアパートだつた。

家に帰ると兄に携帯電話に電話をした。

「直子だけど、お兄ちゃん、今、電話大丈夫?」

(ああ、大丈夫だよ。)

「誠一さんに聞いたんだけど、今日、誠一さんのアパートに行くつて聞いたけど、直ちゃんも一緒にどうかつて」

(そう、誠一さんがそういうなら。誠一さんは直子の「こと」に気に入つてゐるからなあ、昨日も直ちゃん、いい女になつたなんて、言つていたんだぜ。男一人だと暑苦しいと思つたんだらうよ。本当は男二

人で相談したいこともあつたんだけれどもね。まあ、いいさ、直子  
だつたらいいよ、一緒に行こう。」

「じゃあが、誠二さんのアパートの前に8時半ぐらいに待ち合わせ  
しようよ」

（分かつた、じゃあ8時半に）

いつもように両親の料理は用意をしたが、自分は食べず、自分の部屋に向かつた。あつと想い出して、台所に戻り、かぼちゃの煮つけをタッパにつめた。誠二さんの部屋で食べようと思ったからだ。自分の部屋で着るものを使おうと思案したが、先週買った可愛いリボンがついたピンクのカットソーとジーンズを身につけた。デートでもあるまいし、近所の小さなアパートに行くだけなのだから、あまりおめかししても不自然だうし、なんとなく中途半端な格好になつてしまつた。でもまあいいやと思つた。

「ちょっと、友達と飲みに行つてくる。少し遅くなるかもしれない」と母に告げて、家を出た。

8時25分ぐらいに誠二さんのアパートの前に着いた。30分を過ぎても兄は現れなかつたので、携帯に電話をした。

「お兄ちゃん、もう、着いてるよ」

（せうか、ごめんな、仕事が押しかやつてさ、20分ぐらい遅れるから、先に行つていもらえるかな。）

「いいけど、できるだけ早く来てよね」

（分かつていいよ。誠二さんだつて男だからな、大事な妹に手を出されても困るからな。じゃあな）と兄は、電話越しで笑つて言つてから、電話を切つとした。

「あ、まつて、誠二さんのアパートの部屋番号いくつ？」

（あ、ああ、2回の1号室だよ。悪いけどよろしくな）といつて今度こそ切つた。急いでいたのだろう。

直子はアパートの2階の1号室の前でインターホンを押した。

「誠二さんは上下スウェット姿で玄関のドアを開けた。

「直ちゃん、いらっしゃい、待つていたよ」

「あの、兄が少し遅れそうって連絡があったので、先に来ました」「あいつ、人を誘つておいてなんだよなあ。まあ、いいや、入つて入つて」

「誠一さんの部屋は男の人の部屋というのに綺麗に整頓されていた。整頓というより、物がないといったほうが良いだろう。

「まあ、座つてよ」と言つと、誠一さんは台所に向かつた。なんとなく誠一さんの後を着いていった。

「何かお料理しているんですか？」

「何もつまみもないとね、寂しいだらうから」

台所は職業柄か、様々な調味料や調理器具が並べられていた。

「あ、勝手に入つてごめんなさい」と無意識とはいえ、人の家を勝手にうろついてしまつたことを謝つた。

「いや、何も隠すものはないから、いいよ」と誠一さんは言つた。誠一さんはイカとサトイモの煮付けと、大根とゆずの酢の物、茗荷とわかめの和え物を作つていた。

「あの、私もかぼちゃの煮つけ作つてきたんです」と直子はタッパを誠一さんに渡した。

「直ちゃんはいつも夕食を作つているんだつてね。お母さんから孝行娘だつて聞いていたよ。ありがとう」と誠一さんは言いながら、品の良い器にかぼちゃの煮つけを移していた。

これらの料理を全て、部屋の小さなテーブルに並べると誠一さんはビールでも飲むかと言つて、冷蔵庫からビール瓶を出し、二つの口ツブになみなみと美味しそうな泡がのつたビールを注いだ。

誠「さんは直子の作ったカボチャの煮物を口に入れた。

「ああ、上手い。直ちゃんは頭が良い上に、料理もつまいんだね」「なんか、プロに言わると恥ずかしいです」

直子も誠「さんの用意した料理を食べた。

「美味しい」

「そりゃ、それで商売してるからね」

「このわかめと薺荷の合ふもの。薺荷の味が引き立つていて、すごく美味しいです」

「これは店の裏庭に生えていたものを、分けてもらつたんだ」

「ええ、この前、私がいただいた」

「薺荷つくてせがあるだろ、味も草みたいじゃないか。でも、そのくせがたまらないんだよ」

誠「さんはビールをぐいっと飲んだ。

「ああ、ビールもどびきり上手く感じるな」と言つた。

「そういえば、直ちゃんは恋人と上手く行つてているのかな。たまに車で送り迎えしていた」

「あの、彼とは別れたんです。といふか連絡が取れなくなつてしまつて、自然消滅みたいなものです」

「そうなのか…」

「理由も良く分からんないです。でも、そうなつてから思つたんですけど、別に彼のこと、本当は好きじゃなかつたんぢやないかつて。だから、悲しい気持ちにもならないんです」

「そうか、直ちゃんは強いから、この薺荷のよひに、生える場所を変えて、毎年、上手く生きていけるんだ。…それにしても、直ちゃんのような良い女と別れるとはね、その彼氏も馬鹿なことをしたもんだ。こんなに綺麗なのに」

「また、お世辞を」

「お世辞なんかじゃないよ。俺が初めて、寿屋で働くようになったときは、まだ高校生で若いなあつて思つたけど、いつの間にか、大人の良い女になつたように思えるよ」

誠一さんがそうこうとインター フォンが鳴つた。

「隆かな」と誠一さんが玄関に向かつた。

「ごめん、遅れて」と言つてすかずかと部屋に入つてきた。兄は誠一さんを兄のように慕つていたから、このアパートにも何度も着ているのだろう。

「隆、お前、久しぶりだな。久しぶりなのに遅刻とはな。俺らはもう一杯やつてるぞ」

「いいなあ。仕事が押しちやつて、すみません」と兄は茶目っ氣のある笑顔で誠一さんに答えていた。

「それで、なんだよ、話つて」と誠一さんは兄が席に着く前に尋ねた。

「まあ、その前にこいつちも一杯やらせてくださいや」と言つて、すわり、ビールをぐびつと喉を鳴らせて飲んだ。

「ああ、仕事の後のビールは美味しいですね」と言つた。

「まあ、急ぐことないか…。カボチャの煮つけは直ちゃんが作ったもの、残りは俺が作った。食べてみろ」

兄は三種類の料理を口にした。

「ああ、うまいなあ。直子の料理は久しぶりだけど味付けは変わらないね。誠一さんはさすがプロつて感じだ」とうれしそうな顔をしてパクパク食べていた。

誠一さんはビールを飲みながら、その様子を微笑みながら見ていた。一通り食べ終わつたあと、兄は切り出した。

「俺、もう、駄目かと思つてているんですよ。直子にも先日駄目だしされたんです」

「何を?」

「俺、人妻と付き合つていいじゃないですか。考えれば、もう5年にもなります。そのころ付き合つていた婚約者を捨てて、彼女にほ

れ込んだ。相手もそうだったと思つています

「ああ、そうだったな」

「相手も、離婚をして俺と一緒にになると、約束をしました。でも、約束はしたものの、離婚への進展が一向にないんです」

「そうか、俺は結婚も離婚もしたことがないからな、わからぬけど、離婚は相当なパワーが必要だというぞ」

「相手がどうしても承諾しない…、だから、約束を守れないかもしれないって言い出したんです」

「そうか。それで、お前はどう思つたんだ」

「それでも、惚れた女だったから離れたくないと思つています。でも、このまえ、直子にそれを話したんです。そしたら、そんなの辞めろって。そりや、思いますよね」

「うーん…」

誠一さんは黙つてしまつた。

「俺はひ、昔、神楽坂の料亭で働いていたんだ。そのときも腕の立つ板前として重宝されていたんだけど、なぜ、小さな日本料理屋にやつてきたか、知つているかい?」

「いえ、」

直子も兄も「くつと喉を鳴らした。腕の立つ誠一さんが何故、このような小さな店で働いているかは、皆の謎だったからだ。

「俺はね、16のころから別の日本料理屋で板前修業をしていて、26歳になったころ、親方の紹介もあって、神楽坂の有名な料亭を紹介されて働くようになつたんだ。ちょうど直ちゃんと同じぐらいの年齢だった」

16歳というと中学をですぐ、板前修業をする。直子には想像のつかないことであった。

「神楽坂の料亭でも重宝がられてね、一年も経たずに、一通りのことは任されるようになつたんだ。そしてね、少し自分に自信が出てきたというか、余裕が出てきたというか、ある女に惚れちまつたんだ。俺はそれまで料理一筋で生きてきたものだから、心底女に惚れるつてことがなかつたから、あつといつ間にはまつてしまつたんだ。でも相手が悪かつた」

「そうなんですか」

「相手は、その料亭の女将で年も30歳そこそこでとても綺麗な人だつた。まあ、雇われ女将さ。でも経営をしていたのは企業のお偉いさんで、その愛人でもあつたのだ。でも愛人という境遇が彼女も寂しかつたんだろう、俺が思いを伝えると、すぐに恋人のような関係になつた。俺は女将が愛人としてこの店で働いていることも知つていたけど、仕方がないことだと思って、5年ぐらい働いた。もちろん、周りには気づかれないとこつそりね。料亭はその間に評判があがり、お客様もどんどん増えていった」

直子も兄も誠一さんの言葉の一言、一言に聞き入つていた。

「でも5年経つたある日、女将に店を辞めてほしいと突然言われたんだ。愛人に関係がばれてしまつた、このままで、私は店を辞めなければならぬ。でもここまで育てた私の料亭を手放したくない、辞めたくない。だから、別れてほしいってね。俺は彼女の気持ちが痛いほど分かつた。その料亭をやめ、紹介された寿屋へ一ヶ月も経

たないうちに、移ったんだ。彼女との関係もきつぱりあきらめてね

「そんなことがあつたんですか」

「そのときは、不幸のどん底に居たような気がしたよ。でもこの町の人たちは優しいし、寿屋の旦那さんも女将さんもここにやつてきた事情は何にも聞かなかつた。小さい店だからお客さんの反応も厨房に立つていてるだけで分かつたから、やりがいは感じて一生懸命働いた」

「ええ」と直子はうなづいた。だから寿屋は今も繁盛しているのだろうと思つた。

「でも、彼女への思いは5年経つても、10年経つても薄れないんだ。あのときの気持ちが一人でアパートでビールを飲んでいるとふと面影を思い出してしまつ」

「あの…、時々、誠一さんに会いに来る女性は、恋人なんですか?」と私は聞いてみた。

「恋人といったら、そんなものかな、でも強い恋愛感情は彼女には沸かないんだ」

誠一さんは遠い目をして言つた。

「しかしね、先月の末にその惚れた女から、店に突然電話があつたんだよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7111y/>

---

茗荷

2011年11月26日20時58分発行